

はじめに

本報告書は、研究プロジェクト「移動と接触(3)」の研究成果をまとめたものである。本研究は、ディシプリンを限定せず、掲げられた主題のもとに集まったメンバーが、それぞれ自身のテーマと関心に基づいた調査・研究をしながら、研究会において報告し、論文を執筆するという形で進められた。「移動と接触」という大きなテーマのもとに3年間進行したが、3年目となる本年をもって同テーマのもとにプロジェクトと組むのは一区切りとする。

異なる社会や文化との接触や、理想やイメージと齟齬をきたす社会変容のなかで、人々はどうのような世界観、社会観を持ち、次なる社会を構想するのか、それが本プロジェクトに通底する問題関心である。今回は社会学的な研究が主になったが、「移動と接触」というテーマは、そもそもは、もう少し規模の大きい分野横断型プロジェクトのテーマとして考案したものであり、人の移動にともなって歴史・社会・文化の接触場面に生じた相互作用、諸関連を多角的、統合的に研究することを目的としていた。

今号には、掲載順に、「戦略的アクションフィールド理論の成立過程とその概要—ボランティアの潜在的機能研究の可能性に寄せて—」(都築 則彦)、「雑誌『現代農業』表紙にみる女性農業者—1960年代から20世紀末まで—」(長船 亜紀子)、「現代日本における「パパ活」の進展と性の非対称性の検討—イアン・ハッキング *Grade of commitment* 適用の試み—」(松本 妃奈子)、「市民参加型食事サービスに関する予備的考察—1970-1980年代を中心—」(七星 純子)、「学校に行かないことはどう論じられてきたのか—不登校家族の実践を理解するために—」(賀須井 貴子)と題された5本の論文を掲載している。冒頭で述べたように、個々のテーマには広がりがあるが、社会制度や構造変動のもとに出現する社会関係や共同性の現在性を捉えようとする試みである点は共通しているといえるだろう。

「移動」も「接触」も大きく制限されることになった本年度、「移動と接触」というテーマでプロジェクトを続行するかどうかは悩ましい問題であった。プロジェクト名を口にすると失笑を買うのではないかとも思った。調査研究も大きな制約を受けた。しかし、人々の日常は途切れることなく続いており、支援を求める人も、支援に取り組もうとする人も共にその日常を生きていると考えれば、物理的な移動と接触の制限をもって思考を中断すべきではないと考えた。そして、掲載されている論文は、いずれもそれぞれの研究の集大成ではなく、今後の研究をより深化させていくための考察である。どのような状況下にあっても、思考し続けることが若い研究者にとって次のステップにつながることを願っている。

米村千代